

留学から得たもの

私はおよそ四か月間台湾の台北市立大学に交換留学に行きました。まずは私自身が留学で得たと思うことを書かせていただきたいと思います。おそらくこの文章を読んでくださる方は4か月間でどれだけ語学力がどれだけ伸びたのかが気になるとと思いますので、一つは語学力のことを書きたいと思います。もう一つは外国人を見る際の新たな視点を得られたと思うのでそれについても書かせていただきます。

私が台北市立大学に交換留学の応募用紙を提出し面接などを経る過程の中で語学力による選考(HSK、中国語検定などの資格の有無による選考基準)は厳しいものではありませんでした。基準としては“中国語初級程度”でした。私は1年時に第二外国語として中国語を選択しましたがとても実用レベルとは言えませんでした。台北で実際に生活を始めるまではなぜか少しだけ自信がありまして、あまり焦って勉強もしませんでした。具体的に説明すると台北に着いた時には“A是B”“AはBです”、“～在哪裏?”“～はどこですか?”この二つの構文しか話せませんでした。そのせいもあってか台湾で生活を開始してから1~2か月は友達の言うことは聞き取れず、お店でものを買うのも一苦勞でした。自分のイメージでは台湾ですぐに中国語に慣れて、中国語を使って勉強ができると高をくくっていました。こうして不安がいっぱいの留學生活が始まりました。自分の場合は「なんとなく会話になるだろう」「きっと伝わるだろう」という予想を裏切られた形でしたので初めのころはプレッシャーとストレスで自分を責めることもよくありました。その後は親しい友人もでき会話を繰り返したことで簡単な言葉を聞き取れるようになり、言える範囲ではありますが自分の言葉で返すこともできるようになってはいました。しかし中国語のレベルで言うともだまだです。知識はあったとしても話している内容や文法はおそらく中国語ネイティブ就学以前ほどのレベルだと思います。私の場合はこの程度の中国語です。

そしてもう一つ、外国人をみる新たな視点について。今わたしは街で見かける中国語圏の観光客に話しかけたい、その気持ちが非常に強いです。おそらく自分が少し親しんだ言語を使ってコミュニケーションをしたいのだと思います。ただし、このコミュニケーションは深いところでの意思の疎通には至りません。なぜなら私は中国語の勉強時間が圧倒的に不足しているからです。もうひとつ、彼らの思考プロセスは分かりません。言葉の背景がわかりません。外国に暮らし、教育を受け、自分の考えを持つに至った外国人の言葉を完全に理解することなど不可能です。私は外国人と話すという行為を繰り返したいと思います、なぜなら彼ら独自の言葉の感じを知りたいという気持ちからです。何を言ったら興味を示すのか、何を言ったら顔をしかめるのか、その探り合いはコミュニケーションの基本です。外国人と話すというのは語学力に制限があることが前提です、その前提を踏まえたうえで何を言葉にして発するのかを選択し、相手の出方を伺うことが楽しいです。今わたしにとって、外国語話者との会話の集積というのは、まったく異なる言語を使ってどのようにして言葉に意志

を含めているのかを予想するためのリソースです。

これから留学される皆様へ

正直、客観的にみて留学には、いい結果、悪い結果という区別は無いとわたしは思います。もしあるとすれば自分の理想が基準になっているのかなと思います。もちろん自分の理想を掲げて何としてでもそのゴールにたどり着いてやるという気持ちはだれにでもあると思います。実際に努力を続けて理想を手に入れることができた人は素晴らしいです。留学に関して言えばひょっとすると TOEFL のスコアを挙げて、ボランティアを経験し、友達をたくさん作った人の自己満足度と留学に行って自分の思うような成果を上げられなかった人の自己満足度は異なるかもしれませんが、ただし、ここにおいて大切なことは自分の中でそれが資産になったかどうかだと思います。理想とは離れていても、「こんなにも留学は難しいのか」と切り替えられるようになればいいと思います。特に短期の留学はあっという間です。やりたいこと、つまり自分の掲げる理想がいっぱいある人こそ、その実現が滞り自分を苦しめ、留学自体も楽しめなくなると思います。留学は何かの完成を目指すというよりは、大学生活の中でのきっかけをつかむようなものだとは私は思います。外国での生活という外的要因によってなにかが劇的に変わるわけでは無いとわたしは思います。私の場合、留学はあくまできっかけに過ぎませんでした。でも、それでよかったと今わたしは思います。



- 1：台北市立大学に近い中正記念堂
- 2：中国語の授業で期末課題の発表
- 3：夜市の入り口
- 4：台北賓館
- 5：牛肉麵
- 6：故宮博物院